

## 理事長就任のご挨拶

慶應義塾大学医学部産婦人科  
青木大輔

この度の公益社団法人日本臨床細胞学会理事長就任に際しご挨拶申し上げます。

私は約 2 年前に当学会の理事長を拝命し、今回は 2 期目を務めさせていただきます。まずはこの 2 年間、私と共に細胞診、そして医学・医療の発展のために一緒に歩んでくださった全ての会員の皆さまに感謝申し上げます。この 2 年間は本学会の理事長として、日々の細胞診判定業務のみならず精度管理やその体制の維持、学術集会での研鑽と課題・問題点の共有化などを、会員の一人ひとりと共有しているのだという意識を強く持って任にあたって参りました。その結果、本学会自体がひとつの生き物のように息づいて機能し、発展しているのを実感することができました。これは、公益社団法人化により本学会の方向性が明確にされたことによるのだと思います。

そして、これからの 2 年間におきましても公益社団法人としての日本臨床細胞学会の使命を果たすべく、躍進のための土台作りを徹底していく所存でございます。前回目指した

- ・本学会および会員の発する情報や実施活動の透明性・健全性の担保
- ・会員の積極的な研究活動の支援
- ・本学会および会員の社会的認識の再構築

をさらに押し進めていきましょう。

メディアや通信手段の発達もあり、医療従事者の発言はより大きく社会に影響を及ぼすようになりました。「本学会および会員の発する情報や実施活動の透明性・健全性の担保」は以前にも増して重要になり、慎重さを要します。本学会での学術集会等では徐々に洗練されつつありますが、学会以外での活動にも担保が必要になってきました。ここでは会員の発言を抑え込むのではなく、科学的根拠のある有用な情報を発することができるよう、一人ひとりの透明性・健全性のレベルを上げるための具体的な方策をとっていこうと考えます。そのためにも「会員の積極的な研究活動の支援」は不可欠であり、その成果を理解して共有することは学会の権利であり、義務でもあると考えます。現在実行されている研究に加え、今後は研究結果に基づいたガイドライン策定など学会の方向性を決定してく成熟した学会機能の確保を目指します。

ここ数年で本学会に向けられる視線は大きく変わりました。正直なところ、私が細胞診専門医になった 30 年前には上記のようなことが語られることはありませんでした。この変化は社会の成熟や医学・医療の進歩があったことと共に、やはり公益社団法人化の影響が非常に大きいと感じます。その意味で「本学会および会員の社会的認識の再構築」を促し続けます。また、昨年平成 28 年度に皆さまのご支援にて横浜にて開催いたしました第 19

回国際細胞会議 ICC2016 においても社会的認識の再構築の必要性を強く感じました。沢山の国々から多くの方々に参加していただくことができ、その交流なかで、わが国が諸外国においても細胞診業務や細胞診に係る科学を発展させていく活動に積極的に関与していくことを求められていると感じました。それは、単に日本で行われたことを教える、持っていくというのではなく、わが国でのエビデンスいわば品質保証をつけた“製品”やプロジェクトを提示し、かつそれぞれの国で系統化して持続的に発展させていく、というこれまでとは異なる高度な要求になっており、かつ、こういったプロジェクトを科学的に実行していくことは、私たちが多くのものを得てわが国の福祉にフィードバックすることにもなります。これらも公益社団法人としての本学会の本分であり、そのように私たちの自己意識も再構築していくべきでしょう。

ここに述べました所信は全て、本学会の 50 年先を見据えた土台作りのためのものです。この土台の上に、ちらほらと小さな芽が芽吹いているのが見かけられ非常に喜ばしく感じておりますが、それに慢心することなく基盤作りを徹底することが私の任と考えます。

学会員の皆さまにおかれましても、変わり始めた本学会の体質を日々の業務や活動の中に沁みこませつつ本学会の発展にご尽力を賜りたくお願い申し上げます。